

親の情動表現が子ども及びその子どもの友人関係に及ぼす影響

内田 利広・中村 泉美*

Influence of the emotional expression of the parent on the friendly relations between children

Toshihiro UCHIDA and Izumi NAKAMURA*

Accepted June 16, 2020

抄録：本論では、大学生の親の情動表現とその子どもの共感性との関連、さらに、子どもが自分の友人に対する関わり方への影響を検討することを目的とした。大学生への質問紙調査の結果、親（養育者）がポジティブな感情表出をする機会が多い子どもは、友人のポジティブな感情とネガティブな感情に対しての共感性が高かった。また、友人への向社会的行動では、相手への気遣いや程よい距離感を保つことによって、良好な関係を築こうとする傾向があった。親のネガティブな感情の表出があっても、子どもの共感性や向社会的行動は、高くなることがある。特に、「相手のネガティブ感情への同情」では、子どもは、親からのネガティブな情動表現の経験により、友人のネガティブ感情に同情し、寄り添おうとする傾向が見られた。

索引語：情動表現，友人関係，向社会的行動

Abstract: I carried out inventory survey and was intended association that it was consensual between emotion expression and child of the parent of the university student, that a child examined influence on relation for own friend more. As for children with many opportunities when the result did the expressiveness that pro-(rearer) was positive, the sensitivity for the positive feelings of the friend and negative feelings was high. In addition, I tended to be going to get good relations by the social action to a friend by keeping the consideration to a partner and a moderate sense of distance. Even when parents express negative feelings, the child's social action for sensitivity shops of the child may rise. Particularly, describing "sympathy with the negative feelings of the partner," the child sympathized with the negative feelings of the friend through their experience of the negative emotional expression of a parent, and the tendency that I was going to snuggle up to was seen.

Key Words: emotion expression, friend relations, consideration action

* 京都市立神川小学校教諭

1. 問題と目的

(1) 親（養育者）の情動表現と子どもへの影響

田中（2009）によると、幼い頃からより多くの時間を過ごした親との愛着関係ももちろん影響しているが、子どもが成長してからは、日頃の親の情動表現が、その子どもの考え方（価値観）に影響することが明らかにされている。ここでいう「情動」とは、恐怖、驚き、怒り、悲しみ、喜び等の感情のことである。例えば、親の「肯定的情動表現スタイル」（感謝する、誰かを褒める、謝る、他者に共感する等）は、子どもの自己コントロールの高さと関係し、「否定的情動表現スタイル」（相手を責める、怒る、不機嫌にする、失望を表す等）は子どもの自己コントロールの低さと関係し、否定的情動も生じやすくなる。親が肯定的でサポート的な情動を表現することは、子どもがストレスの多い状況でも苦痛に対処し、うまく乗り切るために子どもの自己コントロールを促す（田中、2009）。

Eisenberg & Mussen（1989）の研究によると、ただ単に、情動表現をするだけではなく、親（養育者）が子どもに対して、情動を込めて物事を説明する（例えば、「あなたが何をしたのか考えてみて。トムに怪我をさせてしまったのよ。いつだって髪の毛を引っ張ってはいけないよ。」）ことは、相手のことを自分事として捉えるという、利他性が高い結果と結び付いていることを示している。対照的に、言葉で禁止をすること（「そんなことやめなさい」）や、身体的に拘束したり、体罰を加えたりすること、原因と結果を単に説明すること（「トムが泣いているのは、あなたが髪の毛を引っ張ったからよ。」）は、利他性が低い、または全くないといった結果に結びついていた。つまり、親の情動を込めた説明のあり方が、子どもの利他性と関連していると考えられる。さらに、Eisenberg & Mussen（1989）は、「他人に対して思いやりがあり、親切で、寛容で、援助的で、同情を示すといったことを伴った両親の養育性は、子どもにとって向社会的反応モデルとして役立ち、両親の養育性が、子どもの向社会的な行動傾向の発達を育てるという仮説がかなり支持されている」と述べている。親（養育者）の肯定的情動表現や情動が込められた関わりによって、その子どもは、相手に対して向社会的行動ができたり、相手のことを自分事として捉えることができたり、相手に共感することができるようになると考えられる。

(2) 向社会的行動と共感性

鈴木（1992）の研究によると、女子大学生への質問紙調査の結果、共感性は向社会的行動に対して、有意な正の効果を及ぼしていることが分かっている。このことから、共感性が高い人は、向社会的行動をとりやすい傾向にあることが読み取れ、共感性は向社会的行動の規定因であると考えられる。親子関係とその子どもが行う向社会的行動が関連することは様々な先行研究から示されているが、その向社会的行動に影響を与えている共感性も一緒に考慮することで、より詳しく子どもの性格や考え方への影響について検討することができると考えられる。

そこで、本研究では、大学生（子ども）が自分の友人の喜ばしいことや悲しいことに対して、一緒に喜んだり、悲しんだりする共感性はどの程度あるのか、また相手の立場に立って物事を考えることや相手への気遣いや程よい距離感を保つことはできるのかを明らかにする。そして親の情動表現と子どもの共感性との関連、さらに、その親の情動表現が子ども自身の友人に対する関わり方（特に向社会的行動）にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。

仮説 1：肯定的情動表現をすることの多い親（養育者）の子どもは、共感性が高く、友人に対して

も友好的で親密な関係を築くことができる。

- 2：肯定的情動表現をすることの少ない親（養育者）の子どもは、共感性が低く、友人に対し、向社会性を示さない。
- 3：否定的・混乱的情動表現をすることの多い親（養育者）の子どもは、共感性が低く、友人に対し他者視点の取得が難しく、他者感情への敏感性が低い。
- 4：否定的・混乱的情動表現をすることの少ない親（養育者）の子どもは、友人に対して気遣いができる。

2. 方法

(1) 調査対象

教員養成系国立大学の学部生 241 名，大学院生 4 名を対象に質問紙調査を実施した。そのうち，有効回答は 245 名であった。性別の内訳は，男性 101 名，女性 144 名で，平均年齢は 20.3 歳である。

(2) 実施月日

2019 年 10 月上旬～11 月中旬

(3) 調査方法

大学の講義の前後に質問紙を配布し，回答を求めた。回答形式は，個別回答であり，自記入形式である。また，倫理的配慮として，回答者には，①調査は無記名であり，回答は任意であること，②回答の拒否や中止は自由であり，そのことによる不利益は生じないこと，③質問紙への回答をもって同意をしたとみなすこと，などを紙面および口頭で回答者に伝え，同意する場合にのみ回答を行うよう教示した。質問紙は，回答者へ個別配布し，回答後はその場で回収した。

(4) 質問紙構成

1) フェイスシート 「性別」・「年齢」の記入を求めた。

2) 情動表現スタイル尺度について

森下・福井（2014）の情動表現スタイル尺度 16 項目を使用した。16 項目に関して 4 段階評定（1：まったくない，2：ほとんどない，3：ときどきある，4：よくある）で回答を求めた。回答者の家族の中での親（養育者）の情動表現の特徴（以下，「情動表現スタイル」と表記）を測定するために，これまでで最も印象に残っている親（養育者）の情動表現を思い浮かべて回答するように伝え，時期（幼少期／小／中／高／現在など）に関しては特に指定はしなかった。なお倫理的な配慮として，親については，父親，母親，祖父母を対象とし，その中で回答者が答えやすい人物 1 名を想像して回答するよう，設問 I に記した。場合によっては，近親者や近所の人を設定しても問題ないということを回答者に伝えた。

3) 成人用認知・感情共感性尺度（以下，「共感性尺度」と表記）について

村上ら（2017）の共感性尺度 24 項目を利用した。先行研究では，5 段階評定であったが，情動表現スタイル尺度と友人関係尺度の評定基準とそろえるため，「3. どちらともいえない」の評定を削除し，4 段階評定（1：まったくあてはまらない，2：あまりあてはまらない，3：ややあてはまる，4：とてもよくあてはまる）に設定した。

4) 友人関係尺度

岡田（1995）で見出された友人関係の3特徴に関する17項目を利用し、各項目に関して4段階評定（1：まったくあてはまらない，2：あまりあてはまらない，3：ややあてはまる，4：とてもよくあてはまる）で回答を求めた。

3. 結果

（1）各使用尺度の因子分析

1) 情動表現スタイル尺度

情動表現スタイル尺度16項目のうち、天井効果が見られた1項目を除いた15項目に対して因子分析（主因子法，Promax回転）を行い、因子負荷量.35に満たない1項目を除外し、14項目に関して再度因子分析を行った結果、第1因子5項目、第2因子5項目、第3因子4項目が抽出された（Table1）。先行研究と同様の分析結果となり、第1因子は「肯定的情動表現」（ $\alpha=.84$ ），第2因子は「否定的情動表現」（ $\alpha=.80$ ），第3因子は「混乱的情動表現」と命名した。

Table1 情動表現尺度の因子分析結果
（主因子法，Promax 回転）

項目内容	I	II	III
第1因子 肯定的情動表現($\alpha=.84$)			
a10 良い行いをした他者を褒める。	.79	.06	-.06
a4 悲しんでいる他者を励まそうとする。	.74	-.03	-.01
a15 素敵な人に対して素敵だねと伝える。	.73	.01	-.04
a13 誰かの将来の夢や計画に感激したとき、それを表す。	.72	.00	.00
a7 他者に対して敬意を示す。	.60	-.11	.11
第2因子 否定的情動表現($\alpha=.80$)			
a2 家族内でトラブルがあったときに、相手を責める。	-.04	.70	.02
a8 家族と口論する。	-.02	.68	-.01
a14 ささいなことでかっとする。	-.06	.67	-.03
a5 他者の振る舞いに対して不満を表現する。	.00	.64	-.06
a11 家族からの不当な扱いに対して不機嫌になる。	.09	.63	.12
第3因子 情緒的混乱($\alpha=.76$)			
a3 失敗などをしたときにひどくうろたえる。	-.01	-.05	.82
a6 ひどく緊張するとパニックになる。	-.07	-.13	.79
a9 何かが上手くいかなくなったとき、失望を示す。	.06	.18	.61
a12 納得できない言い争いの後で思わず泣いてしまう。	.04	.15	.42
因子相関行列	I	II	III
I	-		
II	-.20	-	
III	.23	.38	-

2) 共感性尺度

共感性尺度24項目に対して、因子分析（主因子法，Promax回転）を行った。24項目のうち、天井効果のあった1項目を除いた。因子負荷量が.35以上を基準としたところ、第1因子11項目、第2因子5項目、第3因子4項目、第4因子4項目が抽出された（Table2）。第1因子は、「幸せそうな人がそばにいと、自分も同じように幸せになる。」などというような、相手のポジティブ感情に共感している項目と「他者をよく理解しようとするため、相手の立場に立って考えようとする。」などといっ

た、相手の気持ちに寄り添ったり、相手の立場を考えたりしていることに関する項目が混在するため、「他者のポジティブ感情への共感・視点取得」（以下、「ポジティブ共感・視点取得」と表記）（ $\alpha=.92$ ）と命名した。第2因子は、「人の心の動きに敏感である。」「人のちょっとした気分の変化に敏感である。」というような相手のことについて敏感に反応することに関する項目が多いことから、先行研究にならい、「敏感性」（ $\alpha=.85$ ）と命名した。第3因子と第4因子に関しては、先行研究（村上ら、2017）と同様の結果となった。第3因子は、「人が悲しんでいるとかわいそうだと思う。」や「災害にあって困っている人を見ると、同情の気持ちが湧いてくる。」といった項目が含まれていることから、「他者のネガティブな感情への同情」（以下、「ネガティブ同情」と表記）（ $\alpha=.81$ ）と命名した。第4因子は、「つらそうにしている人を見ると、自分もその人と同じようにつらくなる。」や「相手が何かに苦しんでいると、自分もその苦しみをを感じるほうだ。」といった相手のネガティブな感情に対し、自分も同じ気持ちになり、寄り添うような項目があることから、「他者のネガティブな感情の共有」（以下、「ネガティブ共有」と表記）（ $\alpha=.77$ ）と命名した。

ここでいう「同情」と「共有」の違いは、「同情」は相手の気持ちを感じて、自分にどのような感情（可哀想など）が湧いてくるかに主眼が置かれているのに対し、「共有」は、相手と同じ気持ちを感じると共に、さらに相手に寄り添い、相手と同じ苦しみやつらさを感じ取ろうとすることである。「同情」より「共有」の方が、より相手を思いやり、寄り添う気持ちが強いと考えられる。

3) 友人関係尺度

友人関係尺度 17 項目に対して、因子分析（主因子法、Promax 回転）を行ったところ、因子負荷量 .35 に満たない 2 項目を除外し、15 項目で再度因子分析をした結果、第 1 因子 10 項目、第 2 因子 5 項目が抽出された（Table3）。第 1 因子は、「冗談を言って相手を笑わせる。」「相手の考えていることに気を遣う。」など、相手のことを考えた上で行動していることから、第 1 因子を「気遣い」（ $\alpha=.82$ ）と命名した。第 2 因子は、「お互いの領分には踏み込まない。」「相手に甘えすぎない。」などといった、相手との距離感を保っていることを表す項目であることから、第 2 因子を「距離感」（ $\alpha=.76$ ）と命名した。

(2) 各尺度の下位尺度ごとの平均値と SD 及び性差の検討

各尺度の男女別の平均値及び SD（標準偏差）を Table4 に示した。得点の性差について、対応のない t 検定を行ったところ、肯定的情動表現（ $t=3.09$, $df=243$, $p<.01$ ）、ポジティブ共感・視点取得（ $t=2.44$, $df=243$, $p<.05$ ）、敏感性（ $t=3.86$, $df=243$, $p<.00$ ）、ネガティブ同情（ $t=3.19$, $df=243$, $p<.01$ ）において、いずれも男性より女性の方が、得点が高いという結果であった。

このことから、女性は男性よりも自分の親（養育者）の情動表現を強く感じることや、親が娘に対して感情表出をしやすいたことが示唆される。

(3) 親（養育者）の情動表現と子どもの共感性・友人への関わり方

質問紙調査の回答者の共感性、友人への関わり方における親（養育者）の肯定的・否定的・混乱的情動表現の高さが及ぼす効果について検討した。情動表現の下位尺度「肯定的情動表現」「否定的情動表現」「混乱的情動表現」のそれぞれの得点について、平均値 + 0.5SD（標準偏差）を高得点群（以下、高群）、平均値 - 0.5SD を低得点群（以下、低群）、平均値 ± 0.5SD を中間群（以下、中群）と

Table2 共感性尺度の因子分析結果
(主因子法, Promax 回転)

項目内容	I	II	III	IV
第1因子 ポジティブ共感・視点取得($\alpha=0.92$)				
b1_幸せそうな人がそばにいと、自分も同じように幸せになる。	.84	-.13	-.28	.05
b13_そばに嬉しそうな人がいと自分も同じ気持ちになる。	.79	-.08	-.08	.21
b19_相手がとても幸せな経験をしたことを知ったら、私まで幸せな気分になる。	.77	-.06	-.11	.16
b4_努力が実って喜んでいいる人がいと、頑張ったなあと感じる。	.73	-.04	.21	-.14
b22_成功して嬉しそうにしている人を見ると、賞賛したい気持ちになる。	.69	-.01	.24	-.16
b7_良いことがあって喜んでいいる人を見ると、自分も喜びを感じる。	.69	.09	-.01	.03
b20_相手の視点に立って、その人が感じている楽しさを理解するようにしている。	.60	.20	-.08	.03
b10_苦手だったことができるようになって喜んでいいる人を見ると、やるなあと感じる。	.52	-.08	.42	-.09
b16_好きなことに熱中して楽しそうにしている人を見ると、素晴らしいなあと思う。	.47	-.04	.39	-.09
b14_他者をよく理解しようとするため、相手の立場に立って考えようとする。	.45	.32	.06	.03
b2_相手の立場に立って、その人の感じている不安を理解するようにしている。	.43	.30	-.02	.06
第2因子 敏感性($\alpha=0.85$)				
b6_人の心の動きに敏感である。	.00	.86	.01	-.09
b12_人のちょっとした気分の変化に敏感である。	-.22	.85	.07	.08
b18_他者のちょっとした変化に気づく方だ。	-.04	.80	-.13	.03
b24_他者の心の動きに気を配る方だ。	.18	.58	.10	-.11
b8_相手が悲しんでいるときに、相手の立場に立って理解しようとする方である。	.19	.46	.03	.14
第3因子 他者のネガティブ感情への同情($\alpha=0.81$)				
b11_人が悲しんでいるとかわいそうだと思う。	-.19	-.07	.86	.22
b5_困っている人がいと、可哀想だと思う。	-.12	.02	.71	.10
b23_人が冷たくされているのを見ると、可哀想になる。	.06	.02	.65	.05
b17_災害にあって困っている人を見ると、同情の気持ちが湧いてくる。	.00	.08	.60	-.02
第4因子 他者のネガティブ感情の共有($\alpha=0.77$)				
b21_つらそうにしている人を見ると、自分もその人と同じようにつらくなる。	.11	-.06	.14	.70
b15_相手が何かに苦しんでいると、自分もその苦しさをを感じるほうだ。	.11	.04	.05	.65
b3_悩みがあって暗くなっている人といると、自分も暗い気持ちになる。	.01	-.03	.04	.53
b9_相手が何か怖がっていると、自分も同じ気持ちになる。	-.03	.11	.12	.47
因子相関行列	I	II	III	IV
I	-			
II	.61	-		
III	.63	.57	-	
IV	.52	.49	.55	-

Table3 友人関係尺度の因子分析結果（主因子法, Promax）

項目内容	I	II
第1因子 気遣い ($\alpha=0.82$)		
c6_ウケるようなことをよくする。	.72	-.15
c3_冗談を言って相手を笑わせる。	.67	-.08
c17_心を打ち明ける。	.60	-.04
c9_みんなと一緒にいることが多い。	.60	-.09
c12_楽しい雰囲気になるよう気を遣う。	.54	.24
c7_自分を犠牲にしても相手に尽くす。	.52	.06
c14_真剣な討議（話し合い）をすることがある。	.49	.04
c1_相手の考えていることに気を遣う。	.49	.26
c15_1人の友達と特別親しくするよりは、グループで仲良くする。	.47	.06
c13_友達グループのメンバーからどう思われているのか気になる。	.46	.04
第2因子 距離感 ($\alpha=0.78$)		
c5_お互いの領分には踏み込まない。	-.17	.92
c2_お互いのプライバシーには入らない。	-.14	.73
c4_お互いを傷つけないよう気を遣う。	.20	.58
c11_相手の言うことに口をはさまない。	.05	.52
c8_相手に甘えすぎない。	.13	.45
因子相因子間創刊		
I	-	
II	.41	-

Table4 各得点の男女別の平均値及びSD

	男性(N=101) <i>M(SD)</i>	女性(N=144) <i>M(SD)</i>	<i>t</i> (243)
情動表現尺度			
肯定的情動表現	2.97(0.69)	3.2(0.54)	3.09***
否定的情動表現	2.55(0.72)	2.68(0.59)	<i>n.s.</i>
情緒的混乱	2.10(0.64)	2.16(0.68)	<i>n.s.</i>
共感性尺度			
ポジティブ共感・視点取得	3.07(0.56)	3.24(0.49)	2.44**
敏感性	2.90(0.66)	3.19(0.55)	3.86***
ネガティブ同情	2.89(0.68)	3.14(0.49)	3.19**
ネガティブ共有	2.63(0.65)	2.74(0.54)	<i>n.s.</i>
友人関係尺度			
気遣い	2.81(0.71)	2.86(0.51)	<i>n.s.</i>
距離感	2.81(0.69)	2.84(0.57)	<i>n.s.</i>

して3群に分けて、独立変数とした。さらに、性差も独立変数に加えた。そのうえで、共感性と友人への関わり方の尺度得点を従属変数とし、性差と情動表現の高中低を独立変数として2要因分散分析を行った。

1) 親（養育者）の肯定的情動表現と子どもの共感性・友人への関わり方との関連

親（養育者）の肯定的な情動表現を高群・中群・低群の3つに群分けした。さらに、性別も男性・女性に群分けをし、2要因分散分析を行った（Table5）。

ポジティブ共感・視点取得では、肯定的情動表現の主効果が有意であり（ $F(2, 239)=26.60$, $p<.001$ ）、有意水準5%のBonferroni法による多重比較の結果（以降、多重比較ではすべて同じ方法を用いた）、情動表現の高群、中群、低群のそれぞれで差があることが示された。このことから、親（養育者）の肯定的情動表現が高い方が子どものポジティブ共感・視点取得が高くなることが示された。

敏感性の性別（ $F(2, 239)=11.06$, $p<.001$ ）と肯定的情動表現（ $F(2, 239)=7.14$, $p<.001$ ）において主効果が有意であった。下位検定の結果、男性よりも女性の方が、得点が高いことが示され、情動表現の低群と中群、低群と高群の間で差が見られた。

ネガティブ同様の性別（ $F(2, 239)=5.17$, $p<.05$ ）と肯定的情動表現（ $F(2, 239)=15.79$, $p<.001$ ）のどちらの主効果も有意であり、交互作用も有意であった（ $F(2, 239)=4.04$, $p<.05$ ）。多重比較の結果、肯定的情動表現の高群では、男性の方が女性よりネガティブ共有の得点が高く、低群においては、女性の方が男性よりネガティブ共有の得点が高かった。男性と女性の得点を見ると、男性が、親（養育者）の肯定的情動表現が低群から高群になるにしたがって、得点が高くなっていることがわかる。女性にはそのような傾向は見られなかった。

ネガティブ共有では、肯定的情動表現の主効果が有意であった（ $F(2, 239)=4.65$, $p<.01$ ）。下位検定の結果、高群と低群で差があることが示された。親の肯定的情動表現が低い群より高い群の方の子どもは、相手のネガティブな感情に対し、自分と一緒に悩みを共有することが多いことが示された。

Table5 共感性・友人関係における性別（男性／女性）×
肯定的情動表現（高／中／低）の2要因分散分析の結果

因子名	高群 M(SD)		中群 M(SD)		低群 M(SD)		主効果		交互作用	多重比較
	男性 (N=22)	女性 (N=44)	男性 (N=37)	女性 (N=62)	男性 (N=42)	女性 (N=38)	性別	情動表現		
ポジティブ共感・視点取得	3.47 (0.40)	3.46 (0.51)	3.20 (0.43)	3.22 (0.38)	2.75 (0.57)	3.01 (0.53)	1.99	26.60***	1.87	高>中>低
敏感性	3.04 (0.65)	3.33 (0.57)	3.05 (0.48)	3.21 (0.48)	2.69 (0.75)	3.01 (0.61)	11.07**	7.14**	0.48	男性<女性, 高>低, 中>低
ネガティブ同情	3.31 (0.57)	3.20 (0.49)	3.03 (0.51)	3.21 (0.44)	2.55 (0.72)	2.98 (0.55)	5.17*	15.79***	4.04*	男性<女性 高>低, 中>低
ネガティブ共有	2.85 (0.63)	2.86 (0.45)	2.71 (0.60)	2.70 (0.56)	2.45 (0.68)	2.66 (0.59)	0.79	4.65*	0.89	高>低
気遣い	3.14 (0.47)	3.01 (0.42)	2.94 (0.47)	2.84 (0.55)	2.53 (0.86)	2.70 (0.50)	0.06	11.22***	1.53	高>低, 中>低
距離感	3.07 (0.45)	2.84 (0.52)	3.01 (0.47)	2.92 (0.61)	2.51 (0.84)	2.72 (0.55)	0.21	8.55***	2.56	高>低, 中>低

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

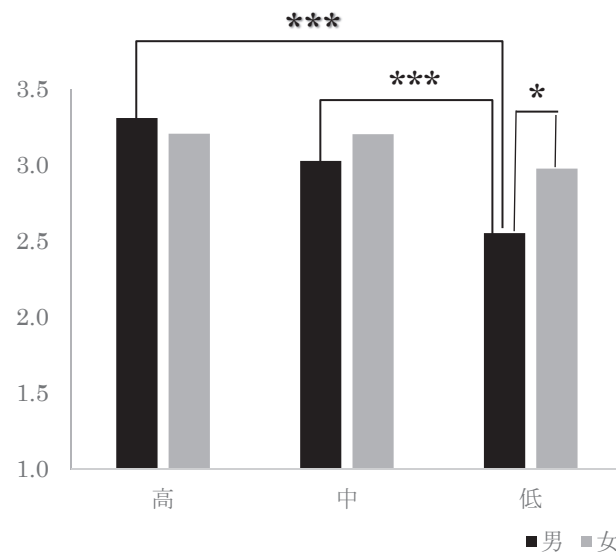


Figure1 肯定的情動表現による
ネガティブ同情の得点

気遣いでは、肯定的情動表現の主効果が有意であった ($F(2, 239)=11.22, p<.001$)。肯定的情動表現の低群と中群、低群と高群の間で差があった。このことから、肯定的情動表現が低い親の子どもより高い、または中程度の親の子どもの方が、気遣いができることが示された。

距離感では、気遣いと同じく、肯定的情動表現の主効果が有意であった ($F(2, 239)=8.55, p<.001$)。肯定的情動表現の低群と中群、低群と高群との間に差があった。性差はなく、親（養育者）の肯定的情動表現が低群から高群になるにしたがって、子どもの共感性や友人への気遣いも高くなることが示された。

敏感性やネガティブ同情において、男性より女性の方の得点が高かったことから、女性の方が、相手に対する意識が高く、相手の気持ちを察知したり、相手のネガティブな感情に同情したり、状況を見て判断した上で行動することができると考えられる。今回の結果から、親（養育者）が家族に対してポジティブな情動表現をする姿を見て、子どもは、共感性を自然ともつことができ、自分の友人に対しても気遣いをしたり、近すぎたり遠すぎたりしない、程よい距離感をとることができると考えられる。さらに、相手のことも自分のこととして捉えられる「視点取得」ができると考えられる。

2) 親（養育者）の否定的情動表現と子どもの共感性・友人への関わり方との関連

親（養育者）の否定的な情動表現を高群・中群・低群の3群に分け、性別も男性・女性に群分けをし、2要因分散分析を行った (Table6)。

ポジティブ共感・視点取得 ($F(2, 239)=6.62, p<.05$) では、性別の主効果が有意であった。下位検定の結果、男性よりも女性の方の得点が高かった。敏感性 ($F(2, 239)=14.87, p<.001$) においても、性別の主効果が有意であった。多重比較の結果、男性よりも女性の方の得点が高かった。

ネガティブ同情では、性別 ($F(2, 239)=10.81, p<.01$)、否定的情動表現 ($F(2, 239)=3.44, p<.05$) の主効果がそれぞれ有意であった。このことから、性別間では、男性より女性の方が得点が有意に高く、否定的情動表現においては、低群と高群における差が大きいことが示された。つまり、親（養育

Table6 共感性・友人関係における性別（男性／女性）×否定的情動表現（高／中／低）の2要因分散分析の結果

因子名	高群 <i>M(SD)</i>		中群 <i>M(SD)</i>		低群 <i>M(SD)</i>		主効果		交互作用	多重比較
	男性 (<i>N</i> =32)	女性 (<i>N</i> =49)	男性 (<i>N</i> =33)	女性 (<i>N</i> =58)	男性 (<i>N</i> =36)	女性 (<i>N</i> =37)	性別	情動表現		
ポジティブ共感・視点取得	3.16 (0.40)	3.24 (0.54)	3.01 (0.53)	3.17 (0.47)	3.04 (0.71)	3.33 (0.45)	6.62*	1.11	0.72	男性<女性
敏感性	2.96 (0.64)	3.3 (0.57)	2.84 (0.61)	3.11 (0.48)	2.89 (0.73)	3.18 (0.63)	14.87***	1.31	0.09	男性<女性
ネガティブ同情	2.99 (0.55)	3.13 (0.47)	2.9 (0.75)	3.06 (0.47)	2.79 (0.72)	3.05 (0.52)	10.81**	3.44*	0.41	男性女性, 高>低
ネガティブ共有	2.83 (0.49)	2.89 (0.51)	2.59 (0.64)	2.7 (0.57)	2.49 (0.76)	2.58 (0.50)	1.34	6.047**	0.05	高>低
気遣い	3.00 (0.71)	3.00 (0.43)	2.73 (0.72)	2.80 (0.46)	2.72 (0.68)	2.76 (0.65)	0.20	4.40*	0.07	高>中>低
距離感	2.99 (0.55)	3.13 (0.47)	2.90 (0.75)	3.06 (0.47)	2.79 (0.72)	3.05 (0.52)	0.19	0.23	0.75	

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

者）の否定的情動表現が高いほど、子どものネガティブ同情の得点が高くなることが示された。

ネガティブ共有 $F(2, 239)=6.05$, $p<.01$) において、否定的情動表現の主効果が有意であった。下位検定の結果、否定的情動表現の低群と高群間の得点差があることが示された。つまり、親（養育者）の否定的情動表現が高いほど、子どものネガティブ共有の得点が高くなることが示された。

気遣い ($F(2, 239)=4.40$, $p<.05$) において、否定的情動表現の主効果が有意であった。下位検定の結果、否定的情動表現の低群と中群、中群と高群、低群と高群のそれぞれの間で差があったことが示された。つまり、親（養育者）の否定的情動表現が高い方が、子どもの気遣いの得点が高くなることが示された。

親（養育者）が否定的情動表現をすることが多いと認識している子どもの方が、親（養育者）からの否定的感情を受け止め、つらい経験をしたからこそ、自分の友人がネガティブなことで悩んでいる際に、相手のネガティブ感情を共有することができると考えられる。また、親（養育者）以外の友人を含む他者に対して、信頼し、気遣いをし、良好な人間関係を築こうとしていると考えられる。反対に、親（養育者）が否定的情動表現をすることが少ないと認識している子どもは、自分が相手から否定的感情を向けられているという状況にないため、友人のネガティブ感情に対して、共有して一緒に悩み、解決をしようという姿勢をとりにくいのではないかと考えられる。つまり、親（養育者）の否定的感情表現が少なく、そのような場面に接する機会が少ないと、他者のネガティブ感情をキャッチし、適切に反応することが難しくなり、共感性も低くなると考えられる。「距離感」に関しては、性差も否定的情動表現の高低による差がないため、友人との距離感においては、親の否定的情動表現とは関連がないと考えられる。

3) 親（養育者）の混乱的情動表現と子どもの共感性・友人への関わり方との関連

親（養育者）の混乱的な情動表現を高群・中群・低群の3群に分け、性別も男性・女性に群分けをし、2要因分散分析を行った（Table7）。

ポジティブ共感・視点取得 ($F(2, 239)=4.14$, $p<.05$)、敏感性 ($F(2, 239)=13.92$, $p<.001$)、ネガティブ同情 ($F(2, 239)=10.05$, $p<.01$) では、性別間による主効果が有意であった。得点は、男性より女

Table7 共感性・友人関係における性別（男性／女性）×混乱的情動表現（高／中／低）の2要因分散分析の結果

因子名	高群 <i>M(SD)</i>		中群 <i>M(SD)</i>		低群 <i>M(SD)</i>		主効果		交互作用	多重比較
	男性 (N=32)	女性 (N=55)	男性 (N=26)	女性 (N=35)	男性 (N=43)	女性 (N=54)	性別	情動表現		
ポジティブ共感・視点取得	3.18 (0.38)	3.23 (0.45)	3.11 (0.50)	3.14 (0.59)	3.00 (0.69)	3.31 (0.47)	4.14*	0.49	2.28	男性<女性
敏感性	2.96 (0.54)	3.19 (0.55)	2.81 (0.61)	3.12 (0.53)	2.9 (0.77)	3.25 (0.58)	13.92***	0.73	0.23	男性<女性
ネガティブ同情	3.01 (0.49)	3.17 (0.47)	2.86 (0.68)	3.12 (0.48)	2.82 (0.80)	3.13 (0.53)	10.05**	0.90	0.39	男性<女性
ネガティブ共有	2.88 (0.53)	2.75 (0.51)	2.67 (0.48)	2.81 (0.50)	2.42 (0.76)	2.67 (0.60)	1.30	4.86**	2.34	高>低
気遣い	2.91 (0.54)	2.97 (0.42)	2.7 (0.94)	2.79 (0.50)	2.81 (0.66)	2.79 (0.59)	0.28	2.09	0.19	
距離感	2.93 (0.47)	2.91 (0.43)	2.64 (0.92)	2.72 (0.54)	2.84 (0.66)	2.85 (0.70)	0.11	2.58	0.11	

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

性の方が高いことが示された。

ネガティブ共有では、混乱的情動表現による主効果が有意であった ($F(2, 239)=4.86, p<.01$)。下位検定の結果、情動表現の低群、高群間での差が大きく、低群より高群の方が得点が高いことが示された。つまり、親（養育者）の混乱的情動表現が高いほど、子どものネガティブ共有の得点が高くなるということである。

気遣い ($F(2, 239)=0.19, n.s.$)、距離感 ($F(2, 239)=0.11, n.s.$) の性別間、情動表現間の主効果は有意ではなかった。

4. 考察

(1) 性差について

本研究は、大学生を対象とし、対象者の親（養育者）の情動表現が対象者の共感性、友人への関わり方に及ぼす影響について検討した。

それぞれの使用尺度において、性別による差があるかを確認するため、対象者の親（養育者）の情動表現スタイル、共感性、友人との関わり方について性差を検討した。その結果、「肯定的情動表現」、「ポジティブ共感・視点取得」、「敏感性」、「ネガティブ同情」において、男女間で有意な差が見られ、いずれも男性よりも女性の得点が高いことが示された。このことから、女性の方が男性よりも、親（養育者）との関わりが密であり、共感性が高く、友人に対しても気遣いしたり、程よい距離感を保ったりして関わっていくことができると考えられる。権田（2019）によると、大学生は、幼少期から現在に至るまで、父親よりも母親と日常的に関わることが多かったと認識しており、父親とは「ほしいものを買ってくれて、自分にお金をかけてくれる」「いざというときは助けてくれる」などといったことから、子どもは愛情を感じている。一方、母親に関しては、「相談に乗ってくれたり、アドバイス

をくれたりする」「いつも真剣に話を聞いてくれる」などといった心理的に支えてくれることから愛情を感じていると考えられる。父親と母親からの愛情の受け取り方は異なっているが、心理的に寄り添ってくれる母親の方が、関わりが多いことがわかる。さらに、権田によると、母親と同性である娘の方が、母親とのつながりが強いことから、親の情動表現が肯定的であるか、否定的または混乱的であるかを強く感じており、本研究において、男性に比べて女性の方が、得点が高くなったと考えられる。

(2) 肯定的情動表現について

肯定的情動表現では、共感性・友人への関わり方の下位尺度において肯定的情動表現の主効果が見られた (Table5)。つまり、親 (養育者) の肯定的情動表現が高ければ、子どもの共感性は高く、友人に対しても向社会的行動をとることができ、親和的な関係を築くことができる。反対に、親 (養育者) の肯定的情動表現が低ければ、子どもの共感性が低く、友人関係においても気遣いの得点が低かった。相手の気持ちへの「敏感性」と相手のネガティブな感情に対しての同情を表す「ネガティブ同情」については、性差も見られ、男性より女性の方の得点が高かったことから、女性の方が、相手に対する意識が高く、相手の気持ちを察知したり、相手のネガティブな感情に同情したり、状況を見て適切な判断をして行動することができると考えられる。今回の結果から、親 (養育者) が家族に対してポジティブな情動表現をする姿を見て、子どもは、共感性を自然に身に着けることができ、自分の友人に対しても気遣いをしたり、近すぎたり遠すぎたりしない、程よい距離感をとることができるようにになると考えられる。さらに、相手のことも自分のこととして捉えられる「視点取得」ができると考えられる。「視点取得」は、相手の立場から他者を理解しようとする認知傾向とされ、「相手の身になってその人の気持ちを理解しようとするものである」(岡田, 1995) と定義されている。自分と親しい存在である友人が嬉しそうであったら、それを見て自分も喜ぶことができたり、友人が悲しい出来事に直面した場合には、自分もつらくなったり、解決策と一緒に考えたりすることができると考えられる。また、それだけではなく、共感性の中でも、特に相手の目線に立ち考えることが向社会的行動という思いやり行動と関連していることが示唆されている (岡田, 1995)。共感性が高ければ、向社会的行動をすることができる機会が多くなる、というような共感性の高低と向社会的行動が連動していることが考えられる。「距離感」については、人それぞれのパーソナルスペースというものを理解した上で、自分の友人に頼りすぎず、疎遠になりすぎず、お互いが良好な関係でいられるような、お互いにとって程よい距離感を築くことができると考えられる。以上の結果を踏まえて、仮説 1、仮説 2 は支持されたといえる。

(3) 否定的情動表現について

親 (養育者) の否定的情動表現の高低によって、差が見られるものもあれば、差が見られないものもあった。「ポジティブ共感・視点取得」、「敏感性」、「ネガティブ同情」では、性差に有意な差が見られ、いずれも男性より女性の方が得点は高かった。島田・佳田 (2015) の幼稚園児の向社会的行動における研究で、女子と男子の向社会的行動発達のメカニズムが異なることが示唆されている。本研究では対象が大学生であったが、同じように、相手にとって嬉しいことや悲しいことに共感し、一緒に喜んだり、つらくなったりすることは、女性の方が行動に移しやすいことが示された。

「ネガティブ同情」、「ネガティブ共有」、「気遣い」では、否定的情動表現の主効果が有意であり、親 (養育者) の否定的情動表現が低群より、高群の方が、上記 3 つの下位尺度で得点が高かったこと

より、相手のネガティブ感情に同情したり、共有したり、友人に優しく気遣いできたりする傾向が高いことが推測される。「ネガティブ同情」では、性別間でも否定的情動表現でも有意差があり、特に、情動表現の高群の男性と女性の差が顕著であった。つまり、否定的情動表現の高群（普段からよく行う親（養育者）の姿を見る）の女性の方が、相手のネガティブ感情に同情しやすく、男性は、親（養育者）の否定的情動表現が、多くても少なくともネガティブ同情の得点は変わらなかった。権田（2019）の女子短大生の親からの愛情の認識における研究で、女子は、幼少期から青年期に至るまで、父親より母親との関わりが多く、母娘関係の距離の近さが示唆されている。日常的な関わりの中で、娘は母親から相手に対する思いやり行動を学んでいることが考えられる。「ネガティブ共有」では、否定的情動表現が低い群と高い群において、差が大きかった。親（養育者）が否定的情動表現をすることが多いと認識している子どもの方が、親（養育者）からの否定的感情を受け止め、つらい経験をしたからこそ、自分の友人がネガティブなことで悩んでいる際に、相手のネガティブ感情を共有することができると考えられる。反対に、親（養育者）が否定的情動表現をすることが少ないと認識している子どもは、自分が相手から否定的感情を向けられているという状況にないため、友人のネガティブ感情に対して、共有して一緒に悩み、解決をしようという姿勢をとらないのではないかと考えられる。つまり、否定的情動表現をあまりしない親（養育者）の姿を見ていると、他者のネガティブ感情への反応が低くなり、共感性も低くなる可能性があると考えられる。村上ら（2017）の大学生の共感性・向社会的行動に関する研究によると、ネガティブ共有は、向社会的行動に正の影響を与えることが示されており、親（養育者）の否定的情動表現が高い群に属する人の方が、向社会的行動を多く取ることが期待される。つまり、親の否定的情動表現は、子どもの向社会的行動を高めるという可能性が示唆される。「気遣い」では、親（養育者）の否定的情動表現の低群、中群、高群のそれぞれで差があった。親（養育者）からの否定的情動表現を多く受けたと認識する高群に属する人の方が、相手を怒らせないようにしたり、場の雰囲気を落ち着かせようとしたりするため、相手の顔色をうかがいながら、気を遣う傾向にあり、自己防衛的な意味も含まれていると考えられる。岡田（1995）の大学生の自己概念と友人関係の関連に関する研究では、お互いを傷つけあわないようにするため、「気を遣う」という自己防衛的な友人関係を築こうとする行動がみられると述べている。親（養育者）から否定的情動表現を受け、つらい経験をした人の方が、友人に対し、気遣いをすることが出来るようになると考えられる。また、気遣いには、人の顔色を窺っているというニュアンスも含まれると考える。親（養育者）から日常的に否定的情動表現を受けている子どもは、親（養育者）以外の友人を含む他者に対して、信頼し、気遣いをし、良好な人間関係を築こうとしていると考えられる。「距離感」に関しては、性差も情動表現も差がないため、友人との距離感においては、親の否定的情動表現との関連は低いと考えられる。

（4）混乱的情動表現について

混乱的情動表現においては、「ポジティブ共感・視点取得」、「敏感性」、「ネガティブ同情」で性差の主効果が有意であった。いずれも男性より女性の得点が高く、「敏感性」における性差が顕著であった。つまり、親（母親）の混乱した情動表現の影響を受けやすいのは、娘の方ではないかと考えられる。また、女性は親との距離が近いので、親から娘に対する肯定的情動の表出も大きいですが、混乱的情動の表出も大きくなると考えられる。一方、男性は、混乱する親（養育者）との距離をとることができるのかもしれないと考えられる。村上ら（2017）は、「敏感性」と向社会的行動に正の相関がある

ことを示しており、相手の感情や行動に敏感に反応できる女性の方が、向社会的行動を取ることが期待できる。「ネガティブ共有」では、混乱的情動表現の主効果が有意であり、混乱的情動表現の高群と低群間の差が顕著であった。高群に属する人の方が、相手のネガティブ感情を共有することが多いことが示された。以上の結果を踏まえ、仮説3、4の否定的・混乱的情動表現の高い親の子どもは、共感性・視点取得・敏感性が低くなり、低い親の子どもは気遣いが高くなるということは、支持されなかったといえる。

5. まとめと今後の課題

本論の目的は、養育者の示す情動表現が、子どもの共感性や友人との関わり方にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることであった。そして、養育者の肯定的な情動表現は、子どもの共感性や気遣いなどの向社会的行動を高め、否定的あるいは混乱的な情動表現は、子どもの共感性や気遣いを低下させ、向社会的性は低くなるのではと仮説を立てていた。しかし、本論で示されたのは、子どもは親の肯定的、否定的情動表現に関わらず、さまざまな情動表現を受ける中で、他者に対する敏感性や共感性、気遣いの気持ちを形成し、向社会的性を高めていくということが示された。これは、親子の情動表現を考えていく際に非常に重要な視点であり、親の肯定的な情動表現はもちろん子どもの共感性や気遣いなどに関連していたが、親の否定的・混乱的な情動表現であっても、子どもはそこからさまざまなことを学び、社会で生きていく向社会的な行動を形成していけることが示唆されたのではないかと考えられる。

課題として、本研究では質問紙の内容が、大学生を対象としたものであったため、子どもの視点から見たことに限られていた。そこで、新たに質問紙の回答者の親（養育者）が、自身の情動表現について答えるよう設定を加えることで、結果が異なってくるのかもしれない。今回の質問紙調査で親（養育者）の情動表現について、回想法を採用したため、回答者のいつの時期（小/中/高/現在など）におけるどちらの親（父親・母親）の情動表現であるかを明確にすることができなかった。回想法では、回答者の記憶が曖昧になってしまう可能性が高く、限界があるため、回答者には、どの時期（何歳ごろ）の親（養育者）の情動表現が印象に残っているのかを回答する枠を設けることも考えられる。

最後に、回答者の現在の居住形態が明確ではなかったため、下宿か実家暮らしかを回答するよう設定することで、親（養育者）と過ごす時間の違いを明確にすることができ、親（養育者）の情動表現が子どもの考え方に及ぼす影響について、より詳しく分析できた可能性があり、今後も検討を続けていきたいと考えている。

参考文献

- Eisenberg, N. & Mussen, P. H. (1989) *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge and New York : Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美 訳 (1991). 『思いやり行動の発達心理』. 金子書房)
- 権田あずさ (2019) 「親から受けた愛情の認識と女子短大生の結婚・出産に対する意識との関連」『山

陽論叢』, 25, 217-230.

菊池章夫 (1984) 「向社会的行動の発達」『教育心理学年報』, 23, 118-127

満野史子 (2015) 「大学生の友人関係における気遣いに研究—向社会的・抑制的気遣いの規定因と影響—」, 風間書房

森下正康・福井えがお (2012) 「母親の情動表現スタイルが女子大学生の情動表現スタイルと自尊感情や自立心に与える影響—母子の信頼関係を媒介として—」『発達教育学研究』, 8, 21-30

森下正康・福井えがお (2014) 「母親の情動表現スタイルが女子大学生の情動表現スタイルと自尊感情や自立心に与える影響—母子の信頼関係を媒介として—」『発達教育学研究』, 8, 21-30

森下正康・稲葉春果 (2016) 「児童期の母親の言葉かけが女子大学生の感情状態や情動表現スタイルに与える影響—パス解析モデル—」『発達教育学研究』, 10, 31-42

村上達也・中山伸一・西村多久磨・櫻井茂男 (2017) 「共感性と向社会的行動および攻撃行動の関連：成人用認知・感情共感性尺度を作成して」『Tsukuba Psychological Research』, 53, 91-102

岡田努 (1995) 「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」『教育心理学研究』, 43 (4), 354-363

澤田瑞也 (編) (1995) 『人間関係の発達心理学 1 人間関係の生涯発達』, 培風館

島田知華・桂田 恵美子 (2015) 「幼児の向社会的行動—母親自身の向社会的行動や養育態度との関連—」『関西学院大学心理学研究』, 41, 45-59

鈴木隆子 (1992) 「向社会的行動に影響する諸要因—共感性・社会的スキル・外向性—」『実験社会心理学研究』, 32, 71-84

田中あかり (2009) 「母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響」『発達心理学研究』, 20, 362-372.

辻道英里奈・植田瑞穂・佳田恵美子 (2017) 「大学生の向社会的行動および共感性と親子関係との関連」『関西学院大学心理科学研究』, 43, 49-54

